

「フィリピン研修参加報告書」

京都大学文学部人文学科 4年 水垣はるか

①学習成果

今回の研修ではそれぞれの団体でインタビューや見学および活動に少し参加する機会があり、それぞれで学んだことについて報告する。まず国際子ども学校 ELCC での職員の方へのインタビューでは活動の難しさが印象的に感じた。ELCC では主にフィリピンルーツの子どもたちの支援を行っているが、一括りに「フィリピンルーツ」といってもそれぞれの家庭の背景は複雑であり、使用される言語一つをとっても様々で職員でも会話できない場合もあるという。職員の方は、あくまで必要とされたときにできる限りの支援をするのみであり、団体側から各家庭の事情に踏み込んで支援することはないという。また、様々な事情で学校での教育を受けづらく居場所がない（主にフィリピンルーツの）子どもたちをなくそうという動機ではあるものの、子どもたちやその家族の逮捕につながる可能性は依然としてあるため大々的な広報活動などは難しく、当事者側からの要請にこたえるしかないという葛藤もうかがえた。

キリスト教系支援団体のところへ伺い、活動を少し見学させていただいた。用意された弁当は何種類かの総菜と白米で、栄養を考えて、できるだけおいしそうに、きれいに盛り付けしていると話していた。支援者の方は訪れた当事者の一人一人の事情を把握しており心身の状態を気遣って声をかけていた。支援者の一人へのインタビューで印象的だったのは、野宿から一般的な生活に戻ることの難しさだ。一時的に野宿になった経験のある方は、自身が「元の生活」に戻れたのは人との縁だったと何度も強調していた。また、同じような支援活動を行う若者との意識の差についても言及しており、若者たちも従来の支援のやり方を参考にしてほしいと話していた。この団体も ELCC もキリスト教系の団体でありボランティア活動の重要性もうかがえたが一方でボランティアという支援活動の限界も伺えた。

生活保護受給に関して活動している方へのインタビューでは、役所とのやり取りの難しさについて伺った。彼によれば、生活保護受給に対応する担当が数年単位で変わってしまうため専門知識やその地域での事情の把握が不十分な担当者そのままになってしまっていること、役所側では面倒な事務作業を増やしたくないため職員が生活保護受給に関して真剣に取り合ってくれないことが問題であり、専門家を設置する必要性を訴えていた。ただ、今回のインタビューでは生活保護受給者側の視点のみであることは留意する必要がある。

②海外での経験

報告者は社会問題に直接向き合うような支援団体の活動に携わった経験がなく、特に当事者と対面で直接話をする経験もなかったため今回の活動内容は大変刺激を受けた。

③プログラム内容

1 日目は ELCC にて職員の方にインタビューを行ったのち、京都に関するクイズを内容とした授業を行い子供たちと交流した。午後は支援団体のコーディネーションでフィリピンパブに携わる方の話を聞いた。2 日目はキリスト教系支援団体の見学とインタビューを行い、午後に生活保護受給に関する活動を行っている方とのミーティングを行った。

④進路への影響について

報告者は来年度から一般企業に就職する予定であるため、今回の研修内容の直接的な影響はなかった。しかし自身の長期的なライフプランでは社会福祉に携わる取り組みを想定しており、その際に支援団体の運営の難しさに焦点がより当たるようになった。